

## 牛の歩みも千里～力強く一歩ずつ～

愛知県立農業大学校 酪農専攻 1年 松本 侑馬

「モー、ンモーウ。」「ああ、餌くれて鳴いとる。」祖母は、そうつぶやくと足早に牛舎に向かって行く。祖父は小さく頷くだけで、滅多に牛舎に行かない。しかし、私をこの進路に導いたのは紛れもなくこの祖父母なのである。

私の祖父母は長崎県で黒毛和種の繁殖農家を営んでいる。畜産農家とはいっても、小規模で、ほかに米や椎茸、林業で生計を立てて暮らしている。私は夏休みに遊びに行くと、遊び半分で牛の世話の手伝いをした。今思うと足手纏いだったかもしれないが、祖母は、「助かるわ。」と笑って喜んだ。ある年の夏休み、いつものように牛舎に遊びに行くとそこには珍しく祖父がいた。逆子だったため、分娩対応をしていたのだ。しかし、牛舎で遊んでいるだけの当時の私に出来る事と言えば、胎仔を引っ張る祖父母を遠目で見ているか、家に帰っておとなしくしていることしかできなかった。しかし、牛が血相を変えて怒責し、普段は牛舎にいない祖父が祖母と汗を流しながら胎仔を引っ張っているのを見て、遠目に見ることを決めた。この場にとどまると決めて30分が経過したころ元気な雌が生まれた。子牛が生まれると、母牛は無心で舐めていた。その時の母牛の顔はとても穏やかで、先刻の顔とは大違い。私はこの経験から、「将来は祖父のような牛飼いになりたい。」と思うようになった。

数年が経ち、私は高校選択を迫られていた。無論、私は牛の勉強をするために農業高校を選んだ。しかし、父はあまりいい顔をしなかった。「お前に農業基盤がないのに農高に行ってしまう？農家になるなんて無理だ。長崎の家を継ぐなんて考えるな。」このやりとりは、今でも鮮明に覚えているし、牛が好きで牛飼いを目指した私の心を深くえぐった。しかし、祖父母が夏に、「自分のやりたいようにやってみればよか。なんでも体験せんことには分らんけんね。」と言っていたのを思い出し、「自分は牛に携わりたいから農高に行く。そのさきは自分が体験してみんと分らん。」と改めて伝え、愛知県立安城農林高校に進学した。しかし、入学して驚いた。乳牛オンリーで和牛がいない。家から近いという理由で高校を決めたため、飼育している家畜を把握していなかったのだ。今でこそ笑い話に出来るが、当時は笑っている暇もない。正直、私は学校をやめたほうがいいのかも思っていた。それに加え、入学した頃はコロナ禍で4月・5月が休校になった。休校期間が明け、私は学校をやめることはなかったが、自分がなぜ農高に来たのかを忘れてしまっていた。ただ時間の流れに身を委ね、惰性でそのまま一年生を終えた。一年生を終えた頃には、牛に携わりたい気持ちが変わることはなかったが、なぜ牛に携わりたいかを忘れてしまっていた。しかし、二年生の夏休みに、なぜ牛に携わろうと思ったのかを再び思い出し、現在の私の夢の礎となる出来事が起こる。

祖父が亡くなった。夏休み初日の夕方、長崎から電話がかかってきた。寝耳に水だった。私は、作業着を鞆に詰め込み長崎へと立った。移動は車で約半日かかる。その間父親は、思い出をずっ

と口にしていた。その思い出話の中で、私が幼い頃、祖父から聞いた、牛飼いの本質を思い出した。「いいか?牛飼いはただ牛を飼えばいいってもんじゃないか。牛に食べさせる草を作るために田畑を耕し堆肥を入れる。今はトラクターや化学肥料があるけん便利やけどむかしは田畑を耕す労力として牛を飼い、その糞を堆肥として使ったんや。牛がおるけん田畑で作物が育つ。その田畑で育った飼料を牛が食べ、また耕し堆肥を入れる。牛を飼うということは農業を発展させるには必要不可欠なんや。」私は、ハッとした。あの時、牛に関わる喜び、楽しみを知って牛に携わりたいと思ったのだ。そして、この喜び、楽しみを多くの人に知ってもらい、同時に畜産業を発展させるような人になりたいという目標ができた。愛知に戻ってきて、祖父の言葉を反芻しながら学校のホルスタインを見ていると和牛とはまた違った美しさや可愛さがあることに気が付いた。金ブラシで牛体手入れをするととても気持ちよさそうな顔をし、もっとやれと言わんばかりにこっちを見てくる。私がやることは酪農しかないと思った。しばらくして学科長から、三年生の夏休みに熊本県の和牛農家に視察研修に行かないかと誘われた。この話があった時、私は飛びついて研修に応募することにした。ちょうど畜産の授業で和牛の一貫経営について学んだばかりで酪農が繁殖経営しか知らなかった私にとってとてもいい機会だった。無事に選考会を通過し、熊本に行けることになった。熊本では農家の後継者不足のほかに農業高校の教職員の不足についても教えていただいた。この経験から、私は農業高校の教職員になろうと思った。農業高校の教職員なら、祖父から教えてもらった農業の喜び、楽しさを学生に伝えることができるし、牛に携わることもできる。私の思い描いていた酪農の夢はこれだったのだと確信した。

月日が流れ、熊本の研修から約1年が経った。私は今、愛知県立農業大学校に通っている。ここでは、教員免許を取ることはできないが農力を身につけることができる。熊本の研修で、ぜひ農業高校の教員を目指してほしいのと、農業の能力「農力」を身につけてほしいとのお話があった。学生に農業の楽しさ、喜びを教える立場の教職員がそれらを知らずしてどう教えるのか。私はまだ知らない、牛に携わる楽しさ、喜びがあるはずだ。これらは、一個一個が大きなものだとは限らないと思うし、小さな楽しさ、喜びの積み重ねで農力が高まっていくと思う。

私の将来の夢は幼い頃から何度も変わっているが、確固たる夢ができた今、牛のようにゆっくりにあるが着実に一歩ずつ踏み出していると思う。牛の歩みも千里というが、私の目指す人生を表す言葉として座右の銘に刻んである。しかし、私が千里に到達することはないだろう。私が千里に到達したときは、牛についてすべてを知り尽くし、学ぶことが無くなった時だ。しかし、私の酪農の夢、人に牛に携わる楽しさ、喜びを教えることができる教職員になっても、現場に入ると私もまた牛たちから楽しさ、喜びを教えてもらうことがあるだろう。この、牛たちから学ぶ姿勢をこの先も忘れずに、私の酪農の夢を実現したい。